弥生時代の人形土器

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36251

周辺遺跡

164-1. ソルビ・オール古墳群
164-2. ソルビ・オール 2000 年調査墓
165-1. ザミン・トルゴイ匈奴古墳群
165-2. ザミン・トルゴイ匈奴墓
166-1. エメール・トルゴイ付近のバヤン・オールの遺跡
167. 平板測量作業

生活

168-1. バトツェンゲル郡(ソム)長の現場視察
168-2. バトツェンゲル郡(ソム)の地域状況の説明 (左下 : 郡長)
169-1. 調査委員の訪問 (1 号墓)
169-2. 調査委員の訪問 (2 号墓)
170-1. キャンプ全景　170-2. 食事準備
171-1. 風に倒れた食堂天幕　171-2. 朝食
172-1. 炎天下の休息時間
172-2. 草原のバレーボール コート

地域のナーダムの祝祭

173-1. ラマ高僧　173-2. 重要人士の面談
174-1. モンゴル相撲選手　174-2. モンゴル相撲競技
175-1. 競馬出走前　175-2. 競馬

発掘調査団員

176-1.2001 年発掘調査団員
176-2. 発掘調査を終えウランバートルにて

翻訳後記

本訳文は대絅민국 국립중앙박물관・몽골국립 역사박물관・몽골과학아카데미 고고학연구소 2003『한 – 몽 공동학술조사보고 제 3 책 몽골 호드긴 톨고이 흉노 무덤』を訳出したものである。この報告は本文・図面篇と写真篇の二分冊から構成されている。原報告は韓国語とモンゴル語の 2 言語で書かれている。翻訳にあたっては主に韓国語版を参照して本文・図版篇の全文と写真篇の目次を訳出した。紙幅の都合上、本文・図版篇の一部の図版、そして写真篇の写真は掲載していない。本稿に再録した図版の番号は原報告のままである (本文・図版編の附録にある図表は各稿ごとに番号が独立しており、本文と続いていない)。ホドギーン・トルゴイ匈奴墓の図面と写真については本稿を参照しつつ原報告を確認して頂きたい。(大谷)

謝辞

『ホドギーン・トルゴイ匈奴墓』の翻訳にあたり、以下の方にお世話になりました。記して感謝いたします。

(敬称略)

宋義政(ソンウィジョン)송의정、金大渙(キムテファン)김대환 (韓国中央国立博物館)、東潮 (徳島大学名誉教授)、高濱秀、宋有宰(ソンユジェ)송유재 (金沢大学)

弥生時代の人形土器

櫻井 秀雄

１．はじめに

平成 24 年 3 月に報告書が刊行された長野県佐久市の西一里塚遺跡群からは、弥生時代の顔面造形が 2 点出土している。私は発掘調査から報告書刊行まで携わり、これらを人形土器として報告した [長野県埋文センター 2012]。本稿ではその資料を紹介するとともに、人形土器について若干の検討・考察を行っていきたい。

２．西一里塚遺跡群出土の事例

佐久市平塚から岩村田地籍にひろがる西一里塚遺跡群は、昭和 47 年以来、数次の発掘調査が行われてきており、弥生時代中後期の集落跡や墓跡などがみつかっている。なかでも昭和 48 年の調査では千曲川流域では初めてとなる環壕の発見があり、注目を集めてきた遺跡である。そして平成 16 年から 18 年の 3 ケ年において、中部横断自動車道建設に伴う発掘調査が 25,100㎡にわたり実施され、2 点の弥生時代の顔面造形が出土したのである。

（１）No1 例

No1 例は、頭頂と底面がわずかに欠損・剥落しているものの、頭部から底部までの全体像がわかる資料である。現存する全長は 28.2㎝を測る。胴部の最大径は欠損しているが 12㎝以上はあると推定できる。

頭部は中実である。頭頂部は盛り上がっており、これは髪形を表現していると思われる。後頭部をみると大部分は剥落しているが頭頂から粘土紐を貼り

付けた痕跡がうかがえる。髪を中央で編んで垂らした形を示していると考えられる。

顔面は左側が欠損しているため、鼻・口と右目、右耳が残っている。顔面は上向きであり、30 度ほどの角度を有する。顎の一部も欠損する。鼻は高く、鼻筋が弓なりに曲がるいわゆる鷲鼻状である。鼻孔は２ケで約8mmの深さまで穿されている。口は「⊥」状に刻まれている。右目は深く彫り込んで形成されている。右耳は中央やや上側に穿孔を施しているが、この小孔より下側は一部欠損している。こうした小孔と沈線で耳を表現していることがわかる。

ほかの身体の部位に比べると鼻がやや大きいことと口の表現が独特であることなど、全体的に誇張された顔面となっている。

このように顔のつくりは異形な様相を呈している。また器面調整はやや粗く、鼻と耳は貼り付けていることがよく観察できる。

赤彩の痕跡は右目から鼻の上側、顎・頸部の一部に残されている。頸部では後ろ側にも赤彩が認められている。赤彩は胸部から底部に至るまでその痕跡が認められる。

左腕部は指頭痕がよく残り、指は先端を欠損しているが 5 本を表現している。右腕は残念ながらみつからなかったが、剥落部分は左腕より下側にあることがわかるため、左右の腕の伸びる方向はやや異なっていたと思われる。

胸部～底部は欠損部分が多いが、空洞になっており、胸部に開口部が認められる。横幅は約 4㎝をはかるとみられる。縦幅は下側が欠損しているため不明であるが、割れ口の観察から最大でも約 1.5 ～ 2 ㎝程度ではないかと推測する。こうした開口部の存在から土偶形容器の系譜を引くものであることがわかる。ただしこの開口部はものを出し入れするには小さすぎるため、その機能は形骸化していたことがうかがえよう。

続いて出土状況についてみてみると、実は頭部と左腕部、胸部～底部と出土場所を異としている。頭部は① -2 区の遺構外からの出土、左腕部は② -2 区・SD37 下層からの出土、胸部～底部までは② -2 区の遺構外からの出土である。

頭部と左腕部は発掘調査段階で発見されたものだが、胸部～底部は、本格整理に入り接合作業を進めるなかで同一個体と判明したものである。頭部 1 点、腕部 1 点、胸部～底部 8 点の破片が接合したものである。出土位置を押さえられたのは左腕部のみであるが、このように部位により調査区は異なっている。これらが出土した調査区は、円形周溝墓・方形周溝墓・木棺墓・土器棺墓等がみられる墓域にあたる。墓との深い関連性が指摘できよう。また出土地点が分かれていることから意図的に破砕された可能性も否定できない。

所産時期は溝の時期や周辺の遺構の状況などから弥生時代後期と考える。

（２）No2 例

No2 例は頭部の顔面右半部のみが発見されたものである。遺構外からの出土であり、現存する全長は 5.6㎝を測る。頭部は中空であり、開口部は後頭部側にあることがわかる。耳には 2 ケの小孔が穿がれている。口も孔で表現している。耳の背後には髪形を表現したとみられる突起が広がっている。これが髷状であるとみれば女性をあらわしていると言えようか。

わずかに剥落した箇所もあるが顔面は扁平であるのが特徴であり、いれずみ等はみられない。のっぺりとした顔である。顔面には酸化鉄の付着が目立っている。内面には指頭痕が明瞭に残る。赤彩は少なくとも残存部分においては認められない。

このように人形土器 No2 は、No1 とはおもむきを異とする。No1 のような異形な雰囲気は感じられず、やさしい印象がする造形である。小さめな口をもつ。頭部が中空で開口部が後頭部にあることも No1 と異なる。

図１　西一里塚遺跡群出土の人形土器 No.1・No.2 例

出土場所については、こちらも遺構外からの出土であり、所産時期をうかがい知ることは難しい。No1 例同様に周辺の遺構には周溝墓などの墓跡や溝跡、遺物集中などがみられ、弥生時代中期後半から後期の時間幅のなかに位置づけられよう。髷状の頭部や顔面の表現などに土偶形容器の作り方を踏襲しているところがみられることから、No1 例よりも古相の要素がみられる [小山 2012]。したがって中期後半も含めた時期の範囲でとらえた方がよいと思われる。

３．弥生時代の顔面造形

弥生時代には、人形土器の他にも土偶形容器・人面付土器・顔面付土器など、顔を含む人体表現のある土製造形がみられる。これらをまとめてみよう。

（１）土偶形容器

頭部が開口し、体部は中空で脚はなく、底面が扁平な土製の立像容器である。再葬と深くかかわる蔵骨器として用いられ、弥生時代前期末から中期前半に集中してつくられたものである。

縄文時代の黥面土偶の系譜を引き、それが消滅する時期を前後した頃にあらわれてくる。全国で約 40 点の出土をみるが、このうち半数以上が長野県内からの出土であり、山梨県とともに分布の中心となっている。県内では佐久穂町館遺跡例の他、男女とみられる 2 体が一対でみつかった上田市腰越の淵ノ上遺跡出土例が著名である。

（２）人面付土器（顔面付土器）

壷形土器の口縁部に人面が付いたものであり、顔面付土器との呼称もある。顔壷と呼ばれる類型もある。人面付土器については石川日出志氏や黒沢浩氏、設楽博己氏、前田清彦氏をはじめとする諸氏が論じている [石川 1987a・1987b、黒沢 1997、設楽 1999、前田 2009]。

論者により若干の認識の差異はあるものの、人面付土器を人面付土器 A と人面付土器 B の 2 つに分けて理解することでほぼ論は一致している。先学の論を参考としながら、以下のように人面付土器 A・人面付土器 B とに分類する。

人面付土器 A は黥面付土器とも呼ばれ、壷の口縁部に沈線文で黥面（いれずみ）を表現した顔をもつものである。弥生時代中期前半からあらわれ、おおむね中期後半までには消滅する。茨城県・女方遺跡例や長野市・松原遺跡例などが類例としてあげられる。

一方の人面付土器 B はこうした黥面装飾がなく、鼻筋が通るなどのより立体的な顔面表現をとるものである。人面付土器 B は人面付土器 A とは異なる系譜からあらわれるようであり、時期的にも弥生時代中期後半に出現し、後期に続いていく。群馬県・有馬遺跡例、千葉県・三嶋台遺跡例、神奈川県・上台遺跡例、神奈川県ひる畑遺跡例などが該当しよう。

４．西一里塚遺跡群出土の人形土器

さて、これらの顔面のうち時期的に西一里塚遺跡群出土の 2 例と合致するのは人面付土器である。黒沢浩氏は、人面付土器 B は人面付土器 A とは異なる系譜下にあらわれることを指摘し、前田清彦氏も人面付土器 A と人面付土器 B とは「その成立事情・時期・分布を異にする似て非なるもの」と言及する [黒沢 1997・前田 2009]。そして黒沢氏は人面付土器 B のうち群馬県・有馬遺跡出土例については「特異な形態」であると述べる。西一里塚遺跡群 No1 例と同じく腕を有し、より立体的な表現となり、しかも耳や口などを強調した表現である。

私はこの人面付土器 B のうち、腕を有するなどより立体的なものについては、「人面付」土器という語にはそぐわないのではないかと考えるものである。前田氏も人面付土器 A と B は呼称を別にした方がよいとの指摘をする。私も同感であり、有馬遺跡や同じく群馬県・小八木志志貝戸遺跡の事例は、近年では「人形土器」という語で紹介されてきていることも踏まえて、西一里塚遺跡群出土の 2 例についても「人形土器」という用語が最もその特性をあらわすのではないかと考え、人形土器として報告するに至った。

５．人形土器の 2 者—A 類と B 類—

西一里塚遺跡群から出土したもう一点、No2 例は人面に装飾的な文様はないことは No1 例と一致している。No2 例は頭部の左半部のみの残存であることからその全体像はつかめないが、開口部が後頭部にあることは確認できた。顔面が平坦ではあるが、開口部の位置などは千葉県・三嶋台遺跡の事例によく似ている。そこでこの No2 も人形土器として認定したいと考える。

ただし、No1 例と No2 例を比べると、No 1 例は「⊥」状に表現するなど誇張された「異形」な様

相を示すのに対し、No2 例はそのようなつくりではなさそうである。頭部が中空であることも異なる。有馬遺跡や同じく群馬県の小八木志志貝戸遺跡の事例は耳や顔、鼻を誇張してやはり「異形」である。したがって、No2 例や三嶋台遺跡例などを人形土器 A 類、No1 例のような誇張表現をもつ「異形」なものを人形土器 B 類として細分してとらえるべきではないかと考える(註 1)。

このように西一里塚遺跡群出土の人形土器のなかでもタイプが違う 2 者がみられることがわかる。また西一里塚遺跡群の 2 例からすれば、人形土器 A 類→人形土器 B 類という変遷の方向性をもつのではないかと私は考える。

なお、長野県内では長野市・榎田遺跡、現在整理中の佐久市・西近津遺跡群などでも破片ではあるが人形土器 B 類の出土をみている。また群馬県では先述した有馬遺跡、小八木志志貝戸遺跡の他、中之条町の川端遺跡などでも出土している。いずれも耳や鼻を強調した異形の様相を示す人形土器 B であると理解できる事例である。

これらは弥生時代中期後半から後期に比定されるものが多いが、千曲市八王子山 B 遺跡例は古墳時代前期に比定されており、この時期まで残るようである。

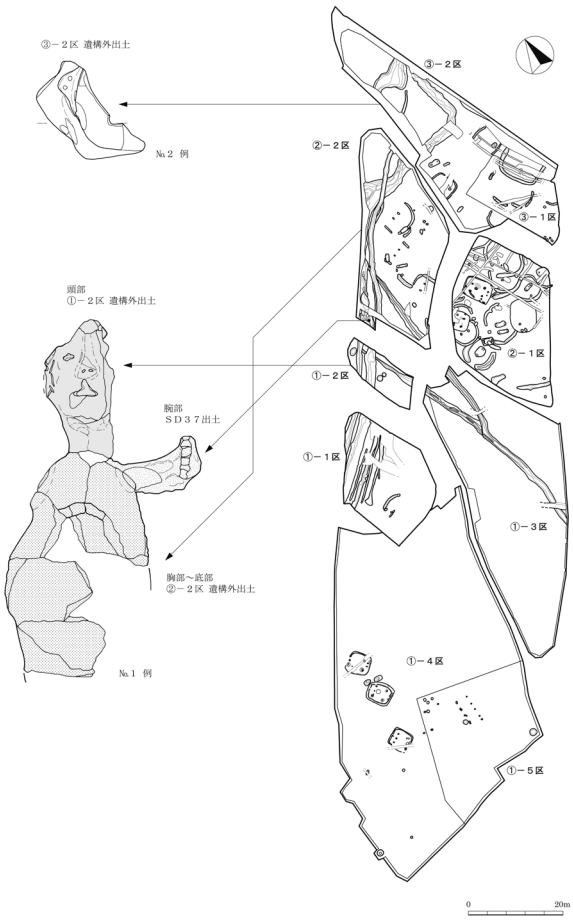

図 2　西一里塚遺跡群出土の品行時の出土地点

６．人形土器 B 類の類例

人形土器 B 類のうち、その全体像がわかるのは、西一里塚遺跡群 No1 例の他には、群馬県の有馬遺跡例と小八木志志貝戸遺跡例がある。

有馬遺跡は渋川市に所在し、弥生時代中期後半から古墳時代初頭まで継続した拠点集落である。報告書では人物形土器という名称である。有馬遺跡例は、高さ 36.5㎝、最大幅 14.0㎝をはかる。特徴的なのは下唇が突き出した口であり、開口部も兼ねている。こうした口の他にも耳や鼻が誇張された表現といってよいだろう。弥生時代後期には周溝墓群による墓域と居住域がみられるが、出土したのは、14 号周溝墓の主体部とみられる礫床墓 401 から南に約 1 mの地点からであり、うつぶせの状態で検出されたという。周辺の遺構の時期から弥生時代後期に位置づけられている。

小八木志志貝戸遺跡は、高崎市に所在し、弥生時代後期から古墳時代前期に続く遺跡である。人面付土器として報告されているが、復元高 27.5㎝、胴部中央部で 17.5㎝をはかる。こちらも口が開口部となっており、「豚鼻」のようなユニークな鼻や大きく広がる耳が特徴的である。本例は 1 区とされた調査区の濠（KS1-07 号遺構）及び東側の土器集中地域（土器捨て場）から出土している。接合関係からすると土器集中地域中のものが破片となって濠中の下層に落ち込んだものと報告者はみている。この 1 区は弥生時代後期中葉には土器棺墓 20 数基が密集する墓域であり、その後は土器捨て場となっていったようである。本例も弥生時代後期の所産とみてよいだろう。

これら 2 例も、西一里塚遺跡群 No1 例と同様に、顔が誇張された異形な様相を示しており、また開口部も頭部ではなく、口や胸にあることがわかる。人形土器 B 類として同類型で理解できるものである。

ところで、人形土器は土偶形容器や人面付土器の系譜を引くものであることは確かであろう。土偶形容器は再葬に伴う蔵骨器であり、その機能は人面付土器にもつながる。それは頭部にみられる開口部の存在が物語る。

人形土器でも A 類では、まだその機能を果たせ

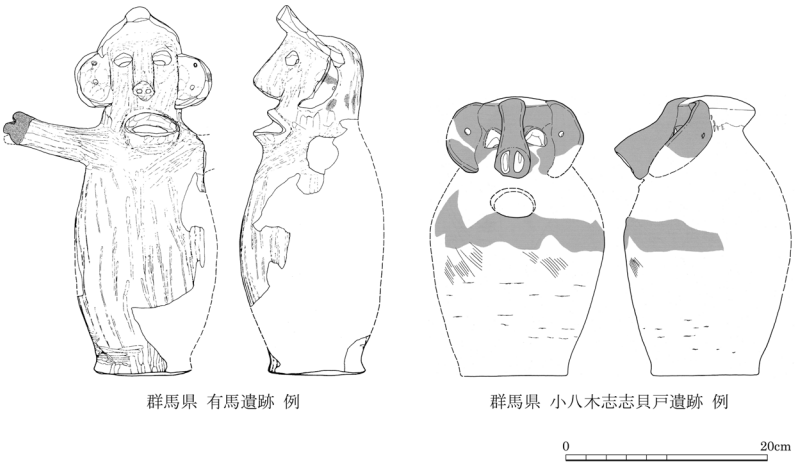

図３　有馬遺跡及び小八木志志貝戸遺跡出土の人形土器

うる開口部をもつが、先述したように、B 類ではその開口部はごく小さいものとなり、開口する箇所もそれまでのものとは異なっていることがわかる。西一里塚遺跡群 No1 例では、開口部は胸部にあり、その大きさも割れ口の観察から最大でも約 1.5 ～ 2 ㎝程度ではないかと推測する。こうした開口部の存在から土偶形容器の系譜を引くものであることがわかるが、開口部はものを出し入れするには小さすぎるため、その機能は形骸化していたことがうかがえる。有馬遺跡例や小八木志志貝戸遺跡例では顔の口がそのまま開口部となっており、これまた出し入れするには都合が悪いことは同様である [註2]。

このように人形土器 B 類においてはすでに蔵骨器としての機能は形骸化していることが読み取れると私は考える。

７．人形土器 B 類の機能・用途は何か？

では、人形土器 B 類はいかなる機能・用途をもつものであったのだろうか。出土状況から探ってみたい。

まず西一里塚遺跡群 No1 例であるが、注目したいのは、離れた地点から出土した部位が接合したことと、墓域からの出土であることである。

（１）墓域からの出土であること。

②-2 区、③-2 区からは円形周溝墓、方形周溝墓が 18 基以上、木棺墓 2 基が検出され、①-2 区では①-3 区へ続く SD15 上面に土器棺墓 5 基が認められている。このように墓域から出土していることが指摘できる。なお、No2 例も墓域の③-2 区からの検出である。

先にみた群馬県・有馬遺跡例や小八木志志貝戸遺跡例でも礫床木棺墓や周溝墓、土器棺墓など墓域からの発見である。また長野市榎田遺跡例もでも墓域からの検出が指摘される。このように墓域から出土したことは、墓と深い関係をもつものであると指摘できよう。墓域から出土したことに加えてこれら 3 例は異形な顔の表現を呈していることからすれば、墓もしくは墓域における辟邪・魔除けのような役割が想定できようか。

（２）離れた地点から出土した部位が接合したこと

No1 例の出土状況をみてみると、頭部は①-2 区、左腕部は②-2 区の SD37、胸部から底部は②-2 区からと、その部位により出土地点を異にする。このことは、以下の 2 通りの解釈ができる。

ア．この人形土器が廃棄された後に、後世の撹乱などにより各部位が分かれてしまった。

イ．人形土器を意図的に破砕する行為があった。

小八木志志貝戸遺跡例では土器捨て場から濠に落ち込んだのではないかとの調査知見があり、また群馬県川端遺跡例のように破片の状態で竪穴住居跡の埋土から出土する事例もある。墓域での辟邪・魔除けという役割を果たしたのちには、（ア）であるか（イ）であるかは不明ではあるものの、廃棄されたと理解できるのかもしれない。

このように私は、人形土器 B 類は墓域における辟邪・魔除けといった役割を果たしていたのではないかと推測する [註3]。先述したように人形土器は蔵骨器たる土偶形容器からの系譜を引くものである。墓域に関連するという土偶形容器以来の性格が、少なくとも人形土器 B 類になると蔵骨器としての機能は形骸化し、辟邪の役目をもつものに変化していったのではないかという見通しを私は立てている。人形土器では再葬墓などの遺構に伴わず、廃棄されたような状態で出土することからも機能・性格の変化が読み取れるのではなかろうか [註4]。

また設楽博己氏は、西一里塚遺跡群 No1 例や有馬遺跡例、小八木志志貝戸遺跡例のような顔を誇張表現した弥生時代の造形 [註5] と、古墳時代の盾持人埴輪との関連性を指摘する [設楽 2012]。私もこの論に賛同したい。岩松保氏も京都府温江遺跡例を

考察するなかで縄文土偶との関連性を指摘し、埴輪との共通性にも言及する [岩松 2011]。人形土器 B 類と盾持人埴輪とでは時間的に間隙があるものの、辟邪の役目をもつ盾持人埴輪が人形土器 B 類と無関係なところから生じたとは考えにくいと私は考える。

人形土器 B 類は、縄文土偶からの流れをもつ土偶形容器にたどれる系譜を引く一方で、埴輪へつながる要素も認められる (註6)。

そして、その最大の性格は「辟邪」ということになると私は考えている。

今後さらなる検討を進めていきたい。

註

註 1　西一里塚遺跡群から約 1.5㎞離れた佐久市西一本柳遺跡例は、弥生時代中期後半の住居跡から検出された。頭頂に開口部をもち、端正なつくりでやさしい表情を呈しているため人形土器 A 類に分類したい。ただし口が二つの穴で作られている点を誇張表現とみるならば西一里塚遺跡群 No1 例と通じるところもみられるわけであり、注目したい事例である。

註 2　平野進一氏もその開口部が小さく納入物の出し入れは困難が伴うことを指摘するが、その体内には信仰にかかわる人骨等、何か特殊なものが納入されていた可能性もあり、呪術的な側面からの検討を要すると論じている [平野 2001]。

註 3　墓もしくは墓域を、その誇張された形相によって邪気などから防ぐ役割を果たしていたと考えるが、その反対に死者の霊を墓・墓域に封じ込めておく役割もあったかもしれない。墓とは何かということとも関連する大きな問題である。

註 4　人面付土器の機能・用途についてもこの観点から検討する必要があろう。

註 5　設楽氏はこれらを「顔面付土器」と分類している。

註 6　西一里塚遺跡群 No1 例の口の「⊥」状の表現は、山梨県黒駒遺跡例など縄文土偶にもあるが、埼玉県東松山市おくま山古墳の盾持人埴輪や和歌山県大日山 35 号古墳の両面人物埴輪など、埴輪にも認められるものであり、私は注目している。

引用参考文献

石川日出志 1987a「土偶形容器と顔面付土器」『弥生文化の研究』第 8 巻 雄山閣

石川日出志 1987b「人面付土器」『季刊考古学』19 号 雄山閣

岩松保 2011「人面付き土器の系譜　(上) (下)」『京都府埋蔵文化財情報』115・116 号

黒沢浩 1997「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル』No.416

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990『有馬遺跡Ⅱ』

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999『小八木志志貝戸遺跡群Ⅰ』

小山岳夫 2012「館遺跡発見の土偶形容器」『佐久考古通信 No.110　特集 佐久の弥生顔面』佐久考古学会

櫻井秀雄 2012「西一里塚遺跡群出土の人形土器」『佐久考古通信 No.110　特集 佐久の弥生顔面』佐久考古学会

設楽博己 1999「土偶形容器と黥面付土器の製作技術に関する覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 77 集

設楽博己 2011「男と女の弥生時代」『列島の考古学　弥生時代』河出書房新社

設楽博己 2012「辟邪の造形」『佐久考古通信 No.110　特集 佐久の弥生顔面』佐久考古学会

長野県埋蔵文化財センター 1999『榎田遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 1998 ～ 2000『松原遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 2012『濁り遺跡　久保田遺跡　西一里塚遺跡群』

平野進一 2001「北関東西部における弥生後期の人面付土器とその性格」『考古聚英　梅澤重昭先生退官記念論文集』

前田清彦 2009「土偶形容器と人面付土器」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行会

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

第 38 回金沢大学考古学大会

平成 24 年 10 月 13 日、第 38 回金沢大学考古学大会を開催いたしました。本号でその発表の概要を掲載します。

■大会発表タイトル及び発表者

松井広信 (人間社会環境研究科 M1)「四爪鉄錨の基礎的研究」